

研究・調査プロジェクト報告

教団教育制度に関して

岩田親静

1、はじめに

本PJは日蓮宗僧侶の教団教育制度に関して、研究・調査を行うことを目的としている。

この問題は、二〇〇八年度の教団付置研究所懇談会では全体会議の資料として「教師育成の現状と課題、展望」アンケートが集められ残されている。(本資料は公開不可の為、これ以上触れない。)各教団においても教師教育は問題と認識されてきたことがわかる。

さて本研究・調査では方法として、まず現在の宗教者が求められていることは何か? という点から考えた。

このことは同時に二一世紀の現在における宗教・仏教の役割をも考えることとなった。(この点に関して、拙者は昨年の教化学研究発表大会「現代と仏教」にまとめ発表してある。)

本研究では社会・世間が現状の僧侶に対してどのように見ているのかを知る。その上で問題点を改正していくことを考えた。求められる教師の姿を知り、そこへの道筋を考えることにしたのである。

社会・世間の目線を知る方法としては、拙者の管見の及ぶ範囲ではあるが、近年の寺院・僧侶への批判点・改正点

を確認し、世間的に見て今の僧侶の何が問題にされているのかを確認することから始めた。

2、寺院・僧侶への批判点

仏教情報センター編『仏教テレフォン相談一〇万件の中身 寺と僧への世間の期待と苦情』（国書刊行会 二〇〇一年）から引用する。

僧侶の人格に対する批判は下記の通り。

資料①

・菩提寺の若い住職が高圧的で嫌いだ。夫の納骨を考えたが、やめた。（九二頁）

・葬儀は必要か？ 現実的には、こちらから僧侶を選べないし、信頼できない僧侶も多い。信頼できる僧侶がいたら教えてほしい。（九五頁）

資料②

高橋卓志『寺よ変われ』（岩波新書 二〇〇九年）

たとえば、ある宗派の相談室に寄せられた住職への苦情では、約束を守らない、飲酒のマナーが悪い、どこでも平気で喫煙する、異性との交際問題の表面化、ぜいたくな生活というように、社会人としての倫理や常識が疑われるものが相談・苦情総数の四〇%以上を占めているという。また常識外の布施を要求したり、平気で借金をして返さない、といった金銭感覚のずれや、お経を平気で間違える、朝のお勤めをしない、掃除をしない、檀家の悩みを聞かない、布教活動をしない、宗教法人としての自覚がなく、布施も寄付も全部自分のものと思っていると、まさに常識を大きく逸脱したありさまが見えるのである。これらの一つひとつが徐々に寺と檀家の信頼関係を突き崩して行く。

（中略）

深刻化する坊さんの地力低下や戒律への違反、社会性の欠如とともに、坊さんの性格や態度までが問題視されるようになってきている。これでは現代社会における仏教の有効性をかたるところの話ではない。（七四頁）

資料①、②ともに僧侶の立ち居振る舞い、信頼感の問題を指摘している。

資料③

高橋卓志『寺よ変われ』

寺に人が来ない、社会から取り残され、社会的有用感がない、といった機能不全はそのままでもいいのか。若い坊さんたちが、出る杭として打たれ、自由に発言できずにいる長老主義や大寺主義的關係を改善しなくていいのか。門を開けられず、社会的問題が見えず（見ようとせよ）調整能力もたず、異分野との協働ができない、といった寺と社会のかわりはこのままでいいのか。経理公開を含めての情報公開も不十分、経済的自立への意欲も感じられず、寄付金に依存し、その結果、檀信徒とのトラブルも頻発、という経済感覚でいいのか。後継者に寺の魅力を残せない、それ故に世襲に頼るしかないという将来展望でいいのか。檀信徒のニーズがわからず、したがってそれに対応したサービス提供に至らない状態でもいいのか。

社会の人々の棄信感に対処できず、宗教的権威はいつまでも続く信じ、社会の方向性が読めない体質のままでもいいのか。葬儀社主導に追随し、個人のリビング・ウィルを無視し、喪主家や会葬者が納得できない葬儀を行い、その結果としてグリーン・ケアへの展開を放棄する葬儀執行者でいいのか。（二一八頁）

資料④

上田紀行『がんばれ仏教』（NHKブックス 二〇〇四年）

住職個人の資質が問われる時代になってきたということに、私も強く同意する。しかし、私は仏教関係の講演で同じようなことを言うと、いつもある種の反論を受けてきた。田舎ではまだ村と住職は法事や葬式で結ばれていて、前

述のおじちゃんの「お前に引導渡してもらうんだ」のように、寺と地域社会の関係はまだまだ崩れていない。個人の実存的なことを問う時代に入ったなんていうのは、都会のある一部のことだけではないか、といった反論だ。それに關してはどう思うか、南に聞いてみた。

「事実それで済んでいるんだったら、私はあえて、それではだめなんだとは言わないです。でもねこの時代は、都会であろうと、田舎であろうと、皆が生きていることに大きな不安を抱えていることは間違いないんですよ。だから表立って地域社会でそういうことを言われないということであんまり安心してるといいうのは、ある意味で住職が鈍いからですよ。」

つまり、そんなことを住職に求めたってどうせ無駄だろうと思ってるから、最初からそういう相談も来ないわけですよ。私のところでは寺にそんなことは求められていないというなら、求められないことに危機感を感じるべきだと思います。むしろ地方にだって引きこもりや荒れた子も多いじゃないですか。介護の問題だって多い。生きることの空しさは、もう都会も田舎もありません。だからそういう問題をお坊さんに投げかけられないことのほうが問題でしょう」(二一六頁)

資料③、④では社会的ニーズを知らない、知ろうとしないこと、また社会的ニーズに適用するだけの技術、技量を有していないことが指摘されている。特に資料③で葬式仏教といわれる中で、リビング・ウイル、グリーン・ケアといった必要不可欠とも考えられるものへの認識不足を指摘している点は重要であろう。

多くの批判書を確認していくと、問題点は以下の三点に集約される。

- ① 僧侶の態度、資質
- ② 社会に対して鈍感、情報不足
- ③ 葬式仏教になり得ていない

これらの問題は、僧侶の世界が閉塞的社會であり、世間との関わりが少ないことと関わりがあると思われる。葬式仏教に関しても、日本仏教の重要な役割であるが、従来型の型にはまったものでなく、（喪主への向き合い方が個別的、特別的なものであることはもちろんながら）リビング・ウイル、グリーフ・ケア等の技術や精神の獲得が必要であり、時代を読み適応する能力が求められていると言えないだろうか。この点は下記の表現ではないが、寺の世襲化とも深くかかわりがあるように思われる。

資料⑤

『日本仏教の危機と未来』（仏教タイムス社 平成二〇年）

大きな問題の一つは、お寺が葬式仏教と結びついて世襲制の組織を作り、運営されてきたこと。これは新宗教などとは大きな違いですが、そのことの閉鎖性というものをどうやって打ち破っていくか。非常におおきな課題になってきている。（八六頁）

3、世襲化をめぐって

さて世襲が閉鎖性を創り出しているのではないかと拙者は考えた。では世襲化のどこが問題であり、克服すべき点は何であろうか？

また肯定すべき点、伸ばしていくべき点は何であるのか？ といったことを考えてみよう。

問題点、克服すべき点

資料⑥

高橋卓志『寺よ変われ』

寺で生まれた子供たちの多くは、一部の宗派を除いて、本来（本来というのは仏教の基盤を構成する戒律に基づく

教えと、それに対応する行動においては、という意味だと考えていたきたい)存在しない寺という「家庭」で僧侶の父とその妻(母)との間に生を受ける。すでにこの段階で「世襲」に向けてのサイクルは動き始めている。そして多くの寺の子たちは「世襲」するために仏教系の大学に進む。宗門立の大学に進学する場合が多く、ここでは宗旨に基づいた専門教育を受けるのである。しかし彼らの中に、真剣に坊さんになるために仏教を理解しようと意欲をもつ者は少ない。寺を世襲するための条件として大学に在籍するのである。(二二五頁)

資料⑦

高橋卓志 『寺よ変われ』

卒業後、多くの寺の子たちは、各宗派が求める「修行」「研修」の場に、必要な期間赴くことになる。それは「家業」として寺を世襲する者に課せられる期限付きの「修行のようなもの」だ。だから修行や研修の場に入ることは、彼らにとってみれば「刑期をつとめあげる」という感覚に似ている。

そんな感覚で発心を起こすことなく、しかも仏教を深く信ずることもなく、学業・修行という期間を過ぎ彼らに、仏教理解への道筋を作れというほうが無理な話だ。

修行を終えた寺の子たちの多くは、社会に出ることもなく、家庭や檀家が待つ寺にそのまま帰る。そして葬式・法事という寺の仕事に専念することになるのである。(二二六頁)

資料⑧

上田紀行 『目覚めよ仏教』

菩提心を獲得する。そして実践するということなのですが、日本仏教の場合は、そもそも世襲制度というものがあって、なぜ自分が僧侶になるのかという動機自身が、自分の父親も僧侶であり、その寺を継ぐために僧侶になるという人が多いわけです。そうなってくると、そのなかで菩提心を獲得する、発心を起こすというのは、逆に非常に難し

いものとなつていくのではないかと思ひます。そうした制度のなかで、どうやって菩提心を獲得するかということは大なる問題だと思ひます。（九九頁）

資料⑨

佐々木閑『日々は修行』

世襲制の最大の問題点は、「既得権益を子どもに残したい」という親の情愛である。普通の会社経営ならそれも許されようが、人に道を説く僧侶の世界では大きな煩惱だ。「他人ではなく、自分の子どもに寺を継がせたい」と思う親と、「親が継げというから継ぎました」という子が、釈迦の教えを伝えていけるはずがない。

生きる苦しみで悩み抜いて、「もう死ぬしかない」、そういうギリギリの立場に置かれた人が、最後の選択肢として選ぶのが出家である。俗世の幸せを諦めて僧侶となり、釈迦の教えに従つて修行し、心を磨き、そこで体得した境地を法話として皆に語る。そこに出家者としての価値があるのにそういう仏教本来の道を、世襲制が奪っている。この点は大いに反省すべきだ。

寺の子息だろうが一般人であろうが、出家した人にとって最も大切なのは、「どういつつもりで僧侶になつたか」というその動機だ。出家の道とは、仏教の中に生きる希望を見出した者が、自分で覚悟を決めて進むものだ。俗世のしがらみで決めるものでない。寺で生まれて寺を継ぐ。それも今の日本では仕方がない。だが、そこには必ず人一倍の覚悟が必要となる。なぜ社会に出ることをやめて僧侶になつたのか、その理由をはつきり言える者だけが、お布施で生きる資格を持つのである。（二〇四・一〇五頁）

資料⑥では行と学がないこと、特に大学進学も世襲するための条件クリアのためであると指摘している。資料⑦では、修行が期限付きであり、刑期をつとめあげる感覚で行われ、真の意味での発心も信心もないこと、社会経験もなく葬式を行つていくことを指摘している。まさに世襲化が寺院・僧侶への批判点の温床と言えよう。発心の問題は、

資料⑧でも同様の批判が行われている。

この点資料⑨の批判は辛らつであるとも言えるが、至極妥当な意見と思うのは拙者だけであろうか。世襲を求める心を煩惱と弾じ、僧侶の本来の姿と世襲化の問題を真正面から取り扱っている。そのうえで、世襲は仕方がないが、覚悟と理由が必要と述べている。

肯定すべき点、伸ばしていくべき点

資料⑩

上田紀行『目覚めよ仏教』

日本仏教における世襲制度、親から子へ、子から孫へというふうに住職の座が移っていくというシステムは、子どもが小さいときから一貫して仏教の教育ができるということ、それは知識においても実践においても、行き届いた教育ができるという側面もあるわけですから、考えようによっては、僧侶を養成するよいシステムになり得る可能性を持っているのではないかという気がしなくてもありません。(一〇六・一〇七頁)

資料⑪

櫻井義秀『霊と金』

組織型宗教は宗教を生業としてしているのであるから、自分の一生をかけて孫子の代まで考えて宗教的行為を行い、信徒には適切な対価で布教や献金を願ひ、双方が無理なく共存共栄できる関係を築こうとする。(一三五頁)

肯定すべき点、伸ばしていくべき点は、資料⑩では信頼がある。教育・実績に一貫した方針が行えるという点を上げている。資料⑪では、無理な献金などをもとめないで双方が生きていく方法を見つけるといったものである。しかし、理想や理論としてはそうなり得るのだろうが、現状がそうなっているのかは疑問である。

先にもあげた『仏教テレフォン相談一〇万件の中身 寺と僧への世間の期待と苦情』では下記のようなクレームが

存在する。

資料⑫『仏教テレフォン相談一〇万件の中身 寺と僧への世間の期待と苦情』

・菩提寺から改築のための寄付依頼がきた。半強制的なような気がして、納得がいかない。（九二頁）

・本堂建設の寄付要請書が届く。これは義務か。拒否した場合、離壇といわれるのではないかと心配だ。（八八頁）

・新盆を迎える。千葉の某宗から、新盆供養として四十万の布施を言われた。この辺りでは葬儀の時よりも、新盆の時にまとまった布施をする習慣だが、年金暮らしにはつらい。（八三頁）

・父が亡くなり、菩提寺に葬儀を依頼したら、戒名料とお布施で一〇〇万円支払うように言われた。どうしたらよいかわからない。借金をしてでも払わないといけないのか。また、今後の四十九日忌や一周忌のこともあり、本当に悩んでいる。（八三頁）

上記の表現が事実かどうかはわかりませんが、少なくとも檀信徒の一部には不満が生じており、クレーム例の寺院では、「無理な献金などをもとめないで双方が生きていく方法を見つける」といった観点は見受けられないと思われる。

4、世襲化をふまえて

世襲のよい点は信頼がある。教育・実績に一貫した方針が行えることである。問題点は発心ある僧侶を作り出せるかということである。また発心を有することも大事だが、時代を読み適応する能力が求められてもいる。この点をふまえて、教団教育制度を考えてみたい。

『せとぎわの仏教 僧侶と寺院の未来』（鎌倉新書 平成一七年）は僧侶の師弟教育を問題とした本である。そこで提案されたものは以下の三点である。

① 社会的経験の必要性に関して、公立学校の教師はインターシブ制度がある。僧侶の信行道場・布研などで、ピラーや障害者の助け合いと関わる。ボランティア活動への参加し体験を深め、想像力の基盤をつくる。

② 世襲化の弊害を減らすため、短期間の研修ではなく、特別な場合を除き長期間の研修が必要ではないか？ 親元での研修は甘くなりやすい。また良い師と巡り会うことは難しい。

③ また外血を導入して、世襲の僧侶に刺激を与える。発心がある人間を入れる。

また『日本仏教の危機と未来』（仏教タイムス社 平成二〇年）では第二部「これからの仏教」の中で僧侶養成システムの問題点として下記のような指摘が述べられている。

資料^⑬

大学や教団の僧侶養成システムの中で、世襲僧侶に新たな自覚を促したり、そうした外の世界に触れる機会はないのでしょうか。

神 ないに近いと思います（笑）。つまり加行とか修練中には、型（形）を覚えることに終始してしまいます。自己が本来に見つめられるのならばいいけれども、短期間のことでですからそこまで深まらない。形だけで終わってしま

う。
よく言うのは「情報発信のトレーニングしかない」ということです。自己を見つめることを除くとすべてが情報の発信です。いかにお経をうまくあげるか、いかに法話をうまくするか、いかに作法をきれいにさせるか。すべて自分側からの情報発信です。このように言うと言つと僧侶養成の指導者に怒られるかもしれません。しかし、私も少しは僧侶のトレーニングに関わっていますから、型の大切さは理解しているつもりですが、今のカリキュラムは情報発信に重きを置き過ぎているように思えます。

情報発信ばかりではなく、情報を受信するトレーニングを組み入れてくださいと、指導者の方々にお願いしていま

す。具体的には「傾聴」です。いかに人のこころを聴けるかということ。情報をいかに受信できるのか、世のニーズ、あるいは、お檀家さんの思いを把握する力を養うことです。（八九・九〇頁）

資料⑬は型にはまった教育の限界、説教等は得意だが人の話を聴くことは不得意、人生相談等に対応するために傾聴の訓練を行う必要性を指摘している。

『せとぎわの仏教』、『日本仏教の危機と未来』はともに外界との接触を求めている。（具体的にはボランティア等を指すのであろうか。）また短期間の修行の限界を指摘している。外血の導入は教育システムというより、宗門の姿勢とも言えるが、傾聴技術の獲得は今後、グリーンフケア等にも必要になる技術であり、大切な指摘であろう。

これらの加行・修行の問題にかんして具体的に他宗はどのような動きをしているのでしょうか？

5、天台宗の課題

『現代における宗教者の育成』（大正大学出版）に塩入法道「その現状と問題点」という論文があり、天台宗の動きが書かれている。その中で問題となった点を上げてみよう。

- ・一般社会に通用する教養を身につけるための教育課程と、僧侶としての人格陶冶の道程の接点が模索される。
- ・よき指導者の必要性、いない場合どのように代替方法はあるか？
- ・信仰心の希薄化、一定の期間山修山学を履修すべき
- ・現職研修の実施
- ・社会との関わり、ボランティア等の関わり

その上で著者は伝統教団の僧侶・住職育成のためのビジョンを示している。その中で拙者が重要と考えるのは以下の三点である。

・寺院・宗教活動の見直し↓社会が寺院に何を求めているのか、求めていないのかを見極め、しつかり対応することが必要。

・目的意識の明確化↓伝統的な宗学からの脱却、社会のニーズを敏感に捉えるための教育を考える。

・僧堂的教育の充実も重要である↓プロ意識・自信を植え付ける。

特に注目すべき点は、「よき指導者の必要性、いない場合どのように代替方法はあるか?」「社会との関わり、ボランティア等の関わり」であり、「社会が寺院に何を求めているのか、求めていないのかを見極め、しつかり対応することが必要」「伝統的な宗学からの脱却、社会のニーズを敏感に捉えるための教育を考える。」と言った具体的指摘は重要であろう。

6、葬式仏教に対応して

寺院・僧侶への批判点の①僧侶の態度、資質と②社会に対して鈍感、情報不足と世襲化の問題を論じてきたが、③葬式仏教になり得ていないに関してはふれてこなかった。ここでは碑文谷創氏の『お葬式』はなぜするの?』（講談社＋α文庫 二〇〇九年）の中で、葬儀について僧侶養成機関で教育をすべきとの意見があったので提示する。

資料^⑭

碑文谷創 『お葬式』はなぜするの?』

僧侶養成機関において、葬儀とはどういうものなのか、そもそも死とはどうとらえるべきか、死別した遺族の心情はどのようであるのか、法事とはどういう意味をもつのか、墓とはどうあるべきなのかについて、実践論としてだけでなく、きちんとした位置づけや教育が行われる必要があるのに、これまであまりなされていないように感じる。

そうであるならば、極端な言い方になってしまいが、僧侶はきちんとした教育を受けていないのだから、葬式、法

事、墓についてはアマチュアでしかない僧侶が、見よう見まねで、寺という現場で葬式、法事、墓に関わるなどして生計を営んでいるのではないか、という疑問が出てくる。（五一・五二頁）

葬儀にかんしてまともな教育も受けず、見よう見まねで行うことに対する批判であり、重要な指摘である。地域により葬儀の形は異なり、あまり本宗の信行道場でも触れていないようである。世間的に日本仏教は「葬式仏教」と思われる風潮でもあり、実際、「寺という現場で葬式、法事、墓に関わるなどして生計を営んでいる」のであるから、葬儀に関しては、大切なものと考え研修すべきと思われる。

7、おわりに

最後に、かなり私見が入るが、教団教育の問題点と克服について考えてみたい。

本課題では、発心を起こさせることが重要な問題の一つとなった。しかしこのことは実は容易ではない。かく言う拙者も確固たる発心・信心を有しているかは疑問ではあるが、多くのよき師、縁に恵まれたこともあり、世襲、出家した時よりは、いささかましにはなったのではないかと思っている。

それ故、天台宗の指摘「よき指導者の必要性、いない場合どのように代替方法はあるか？」は大切な指摘と考える。しかしこれはなかなか難しい問題である。Aの人間にとって有用な人物であっても、Bという人間には悪影響をあたえる場合も考えられ多いに検討すべき点である。本宗にとつては、信行道場のスタッフに関しての選定基準を明確化し、検討することも必要であるかもしれない。

時代を読み適応する能力に関しては、一定の社会経験やボランティアの経験を促すシステムが必要なかも知れない。特に個人的経験から言えば医療系ボランティアの経験は、葬式仏教という「いのち」の終演に関わる我々にとつて貴重な経験になるかもしれない。

ただし、これら社会的ニーズを知り対応するためにも、傾聴の技術は重要かつ不可欠なものとなる。苦とは理論としては普遍的なものとは言えるが、現象として見えるものは、個別的・特別的なものであり、それぞれ個人が置かれる時代・状況によって異なるからである。

また葬儀に関して教育をすることは重要であろう。「死とはどうとらえるべきか、死別した遺族の心情はどのようなのか」と言ったことは、実感がないにしても学ぶ必要があるであろう、それによりデス・エディケーション（死の準備教育）や遺族・親族の心情を推測し、グリーフ・ケアを行えるようになると思われる。

その上で、修行期間を延ばすことも検討すべきであろう。三五日間の信行道場をもって住職になる資格を有することになるが、世襲の弊害が「親元での研修は甘くなりやすい。」ことでもあり、「自己を見つめる作業」を促していくためにも長期の研修が必要となると思われる。